

大度浜海岸ガイドブックを作ろう！

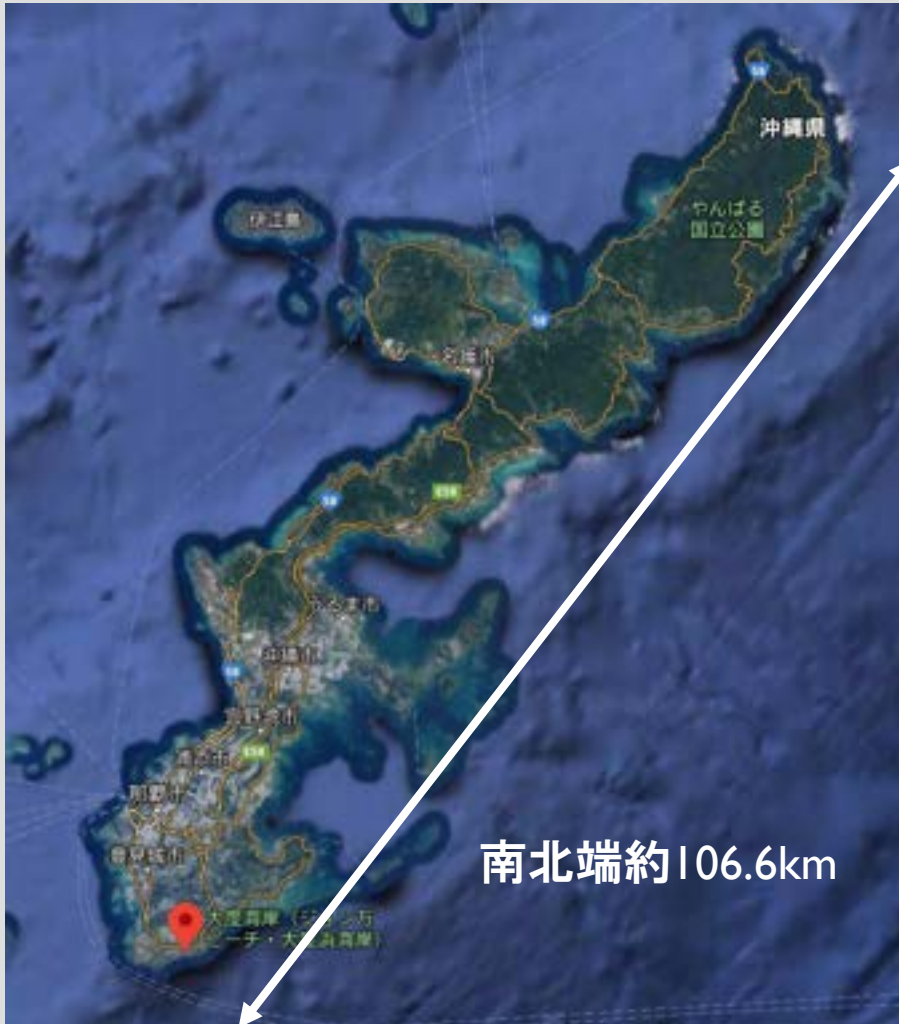
生物系有志の会
濱本耕平（代表・発表者）
有働竜也・相馬健晟・濱本奈々瀬

2022年2月21日
成果報告会

糸満市大度浜海岸



大度浜海岸とは？



- 沖縄の南端にある小さな浜
- 地元の人のみならず観光客も多数
- 礁原（ヒシ）と礁池（イノー）
空から見るとこんな感じ

生態学調査を実施



掲載用の写真撮影



地元の方への聞き取り

ガイドブック作成



生物相の調査





レイアウトについて



イノ
の
いきもの



ニセクロナマコ

からだの後ろ半分を岩の下に隠して
いて、触ったりするとひっこんでこ
なくなります。あんまりいじめると、
キュービュ器官という白いモヤモヤを吐
き出して、くっつくとなかなか取れま
せん。

特徴 クロナマコより細く表面
がギザギザしている

食べるもの 砂（表面の栄養分）



クリイロナマコ

岩の上に乗っかっていることが多いナ
マコで、岩によく似た色なので見つけ
にくいナマコです。お尻に歯があっ
て（肛歯といいます）、これはカクレウ
オというお尻の穴に住む魚に入られな
いためだと考えられています。

特徴 クロナマコより細く表面
がギザギザしている

食べるもの 砂（表面の栄養分）

大きさ 10～20cm

生息地 砂地の岩かげ

大きさ 10～20cm

生息地 砂地の岩かげ



アダン

地面の近くで何本にも分かれている幹が体全体を支えている。20cm ほどの大ききになオレンジ色の果実は、ヤシガニの好物。触ると血が出るほど痛いギザギザの葉は、切り取った後に乾燥させると、くば草や草履を作るための材料になる。ギザギザがないアダンを見つけたら、トゲナシアダンという別の種かも！探してみてね。

大きさ 3~5m
特徴 ギザギザの葉

人との関わり 食べる(実や新芽)、飾り(葉)
誰に食べられる? ヤシガニ



シマアザミ

砂浜に近い岩場に生息し、白い花を咲かせる。根や葉は昔からきんぴらや佃煮にして食べられてきたが、最近は肝臓に良い健康食品として注目されている。野生の動物は葉のギザギザを嫌って食べることは少ないが、家畜(特にウシ)の餌とされることが多い。沖縄本島では白い花が多く、紫色は珍しいが、奄美と八重山では逆に白が珍しい。

大きさ 15~100 cm
特徴 ギザギザの葉

人との関わり 食べる
誰に食べられる? ウサギ、ウシ

6

7



オオバギ

名前の由来は「大きい葉っぱの木」。表はツルツル、裏はフサフサの感触で、葉脈が葉のはば中心から出ているのが特徴。昔は山でうんちをした人が、この葉でおしりを拭いていた。ツルツルな表面とフサフサな裏面のどちらで拭き取るのか、おじいとおばあの間で意見が分かれるという。ヤギの大好物でもあるので、食べさせたら喜ぶはず。

大きさ 4~10m
特徴 大きな卵形の葉

人との関わり おしりを拭く
誰に食べられる? ヤギ、シジミチョウ



タチアワユキセンダングサ

いわゆる「くっつきむし」。日本には園芸目的で入ってきた、熱帯アメリカ原産の外来種。背が高くなると茎が倒れて地面を這う。実はトゲトゲしている部分が犬や人などにくっつくことで、種子を広い範囲に運んでもらっている。この方法を使う他の植物の種子にはトゲトゲやネバネバなど様々なタイプがある。海岸以外でもよく見られる。

大きさ 50~110 cm
特徴 白い花

人との関わり 種がくっつく、ハチミツの元となる
誰に食べられる? ハチ(蜜を吸う)

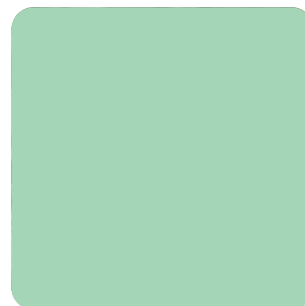


大きさ 約25m
特徴 大きく広がった枝

モモタマナ

公園などに植えられていると、大きく広がった枝葉を木陰として利用できる。果実は皮が硬く、海水に浮かび漂流することで生息地を広げるため、砂浜に落ちていることもある。陸地でもコウモリが果肉を食べた後の果実をよく見かけるが、それを割って出てくる種子は私たちも食べることができるので、見つけたら試してみよう！

人との関わり 食べる、木陰で休む
誰に食べられる？ オオコウモリ



微

生息地 海岸近くの森
食べるもの ギョボクの葉っぱ（幼虫）



大きさ オス7~10mm メス35~50mm
特徴 大きい

オオジョロウグモ

黒地に黄色の縦縞が入る個体が多いが、黒色型、赤色型など姿が違う個体もある。日本最大のクモだが、オスはメスに比べてとても小さい。巣を見ると、中心にメス、端にオスが数匹いることが分かる。オスが巣を作ることはなく、メスが作った巣に居候する。また悲しいことに、交尾に失敗したオスはメスに食べられてしまう。

生息地 平地~山地の森林
食べるもの チョウやセミなどの昆虫

生息地
食べるもの



シロチドリ

灰色の背と白い腹を持つチドリ。海岸や河口域の砂洲、埋立地などで繁殖する。冬にかけて夏羽になるとオスは褐色、メスは淡い褐色となる。この色は周囲の砂地と同化するための保護色だと考えられている。ヒナがいる時に外敵が近づくと「擬傷」という傷を負ったようなフリをして敵の注意をそらし、ヒナを守る。

大きさ 約17 cm
特徴 冬に夏羽に変わる

生息地 河川敷、干潟、湖、池などの水場
食べるもの 小型のカニやゴカイ、水生昆虫



ナキオカヤドカリ

色は白、水色、紫、赤など様々だが、成長すると多くの個体は茶色っぽくなる。小型の個体は主に砂浜にいる。大型になると浜から少し離れたアダン林などに隠れていることが多いが、夜間に海水や餌を求めて海岸近くに現れることもある。沖縄では身近な生物だが、国指定天然記念物のため触ったり捕まえたりするのは禁止されている。

大きさ 1～6 cm
特徴 幼生の時は海中で過ごす

生息地 砂浜、砂浜近くの林
食べるもの 植物の実や動物の死体など



ツノメガニ

ツノメガニを含むスナガニの仲間は足が速く、あっという間に走り去る姿や、夜は体が砂の色に紛れて影だけが動いているように見える姿から「ゆうれいガニ」とも呼ばれる。腹側の模様の幅が広く円形に近いのがメスで、幅が狭く三角に近いのがオス。砂浜で見かける500円玉ほどの大きさの穴には、このカニが住んでいることが多い。

大きさ 甲羅の幅が約4 cm
特徴 目の上に角のように伸びた突起がある

生息地 砂浜
食べるもの 濡れた砂の中の微生物、海水中のプランクトン



ムラサキオカヤドカリ

小型の時は体色ではナキオカヤドカリと見分けがつかず、眼柄（飛び出した目の部分）の下の暗い色の線の有無によって見分けられる。その線が無いものがムラサキオカヤドカリである。大型になると青系統の色になることが多い。ナキオカヤドカリと同じく、日本に生息するオカヤドカリ類はすべて天然記念物に指定されている。

大きさ 1～6 cm
特徴 幼生の時は海中で過ごす

生息地 砂浜、砂浜近くの林
食べるもの 植物の実や動物の死体など



ウデフリクモヒトデ

トゲトゲの腕を5本持つが、毒は無い。水面に浮かんだ泡(浅瀬の生き物たちが出した粘液など)を、腕を伸ばして水面を撫でるように振って集めて食べる姿から、この名がつけられた。腕がちぎれても時間をかけて再生させられるが、ちぎれやすいので無理に引っ張ることはやめよう。このヒトデが腕を振り始めると、満潮が近づいている合図。

大きさ 10 cm 以上

特徴 サンゴや岩場の隙間から腕だけ出している姿

生息地 インド・西太平洋域に広く分布し、**園**に分布。

食べるもの 浅瀬の生き物たちが出した粘液など



クロナマコ

浅瀬にいる個体は体が小さく、深い場所にいる個体は大きいという。生息する深度で体の大きさが変わる不思議なナマコ。体に砂をまとって、太陽の光から体を守っている。最も多く見られるナマコの1つで、もりもりとうんちをしています。

大きさ 10～20 cm

特徴 体は太く短く、表面がスベスベしている

生息地 砂地の岩陰

食べるもの 砂(表面の栄養分)



クモハゼ

6月～9月頃、体長が5 cm 以上の大型のオスは岩の割れ目や穴に巣をかまえ、メスに求愛をして巣穴に産卵させる。体長が5 cm 以下の小型のオスは、他の大型のオスが巣穴でメスに産卵させる瞬間を待ち伏せして精子をかける「スニーキング」(こっそり盗むという意味)という戦略で子孫を残そうとする。

大きさ 3～8 cm

特徴 頭の丸みが強く、体は太く短い

生息地 岩礁の潮溜まり

食べるもの 小型の甲殻類



ニセクロナマコ

体の後ろ半分を岩の下に隠して、触ると引っ込んで出てこなくなる。あまりいじめると、身を守るためにおしりから「キュービエ器官」という粘着質の白い糸のような組織を吐き出す。これは体にくっつくとなかなか取れないので、むやみに触らないように気をつけよう！

大きさ 10～20 cm

特徴 クロナマコより細く、表面がギザギザしている

生息地 砂地の岩陰

食べるもの 砂(表面の栄養分)



ヒメジャコ

石灰岩などに開けた穴に埋まって生活している。貝殻を開ける力が強いので、隙間に指を入れると危ない。サンゴのように、褐虫藻という光合成を行う生き物を体内に取り込み共生していて、褐虫藻から栄養をたくさんもらっている。貝殻の隙間から見える外套膜は、カラフルな色をしていることが多い。漁師さん以外は取ってはいけない。

大きさ 約8 cm

特徴 海底で貝殻を上向きに開いている

生息地 サンゴ礁

食べるもの プラクトン



ホンソメワケベラ

他の魚の体表やえら、口の中に住む寄生虫や食べかすなどを食べてくれるので、海の掃除屋さんと言われている。掃除される側の魚は、普段は小型の魚を食べるが、ホンソメワケベラのことは食べずに、掃除しやすいようにじっとしていることが多い。手を水中に入ると、手についた汚れなども食べて掃除してくれることがある。

大きさ 約12 cm

特徴 オスの方がメスより大きい。

生息地 太平洋とインド洋の熱帯・亜熱帯の海に分布。

食べるもの 他の魚の体表や口の中にいる寄生虫、食べかす



フトユビシャコ

捕脚と呼ばれる一番前の脚を使って、強烈なパンチを繰り出す。その威力はとてつもなく、ケガをしてしまうこともあるので、素手では絶対に触ってはいけない。普段はこのパンチを使って獲物を弱せたり、貝の殻やカニの甲羅を割ったりして狩りをしている。

大きさ 約10 cm

特徴 まだら模様

生息地 岩場

食べるもの 貝類、甲殻類



ルリスズメダイ

英語では「青い悪魔」と呼ばれているほど、気性が荒い魚。縄張り意識が強く、オス1匹に対してメス5〜6匹のハーレムで生活している。尾ひれが透明なのがメスで、瑠璃色なのがオス。元々はメスだけの群れだが、繁殖のために群れて一番大きなメスがオスに性転換する。

大きさ 約6 cm

特徴 全身鮮やかな瑠璃色

生息地 浅いサンゴ礁やタイドプール

食べるもの

サンゴ

生きているサンゴは、皆さんが砂浜で目にする骨格ではなく、イソギンチャクがたくさん集まったようなつくりをしている。

骨格の穴1つ1つにポリプというイソギンチャクの腕のように柔らかい部分があり、そこに褐虫藻という藻の仲間が住んでいる。

サンゴの食事方法は、主に2種類。

1つは、昼間褐虫藻が光合成で作った栄養分の余りを分けてもらう方法、もう1つは夜間自らの触手を伸ばして海中のプランクトンを捕食する方法。

サンゴ自体の北限は千葉県あたりまでだが、サンゴ礁が作られるのは鹿児島県以南。



キクメイシ

代表的な造礁サンゴであり、塊状のものが多い。死後の骨格が菊の模様のように見えることからつけられた名前。



クサビライシ

単体性のサンゴであり、他のサンゴと違ってある程度の移動ができる。



コモンサンゴ

テーブル状、被覆状、枝状など、様々な形態が見られる。



シコロサンゴ

大きくて厚い葉状片が板を組み合わせるように垂直に生育し、全体的には大きなドーム状の群体を作る。



ハナヤサイサンゴ

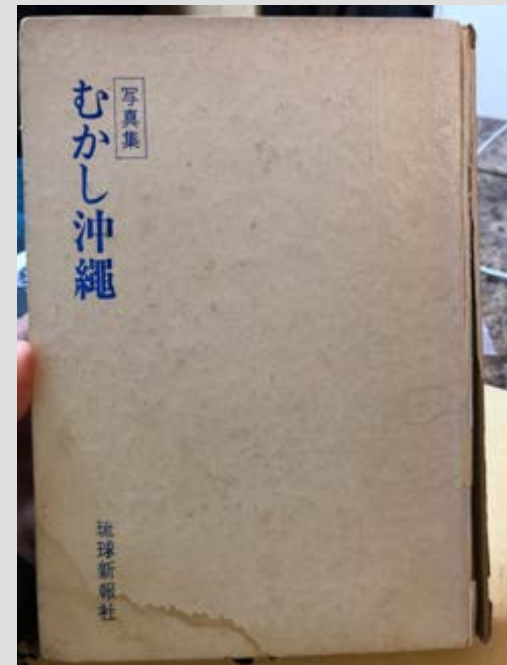
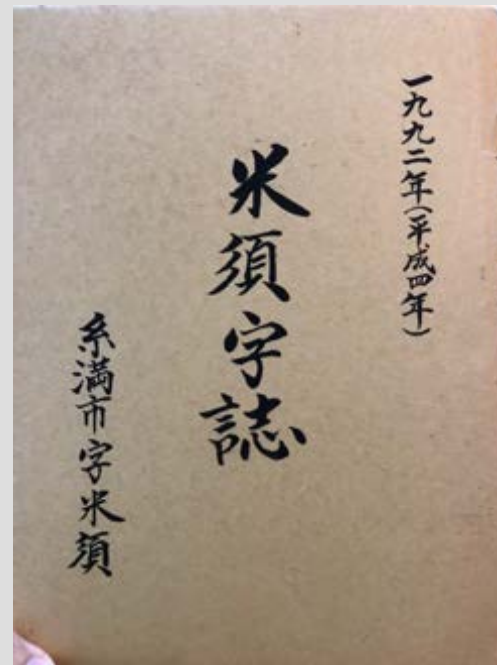
カリフラワーのような形状が基本だが、生息環境によって形状は大きく変化する。



ミドリイシ

先端に大きなポリプがみられる。サンゴが生育する海で最も多く見られる種。

大学生側の学び



米須地域の戦前から戦後
にかけての歴史・海との関わり

大学生側の学び



明治時代 著 著 明治時代 (明治時代大百科) (明治時代大百科)

プロジェクトの成果



ガイドブックの作成



地域の方との交流

＋ 地域の子供達に使ってもらう

今後の課題

- ①デザインの完成
- ②発注および納品
- ③学校や公民館への配布

謝辞

地域連携推進機構



小島先生

新城様

米須地区自治会

神村進様

仲宗根清進様

画像提供

世古徹様、國島大河様、児玉悠仁様

ご静聴ありがとうございました。

